



9 10 1 2 3 4 5 6 7 JAPAN 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20

言云  
緒臺  
炎鳥  
止于江  
隅

卷二



中江藤樹肖像

中江藤樹

藤樹中江氏名を原字へ惟命通稱の號中屬門とひふ江州  
吉野郡別荘村よりあり藤樹と號して頭軒喩號とも  
り慶長十三年出生を記すまことに十之年也其後を  
傳々く舊の事向の甚きとてゆか學究とあく遙乎  
和圓か和く陽の三氏の學と儒へ舊學方略なりとて其  
名海内に著る冠位と號め座は侍へりしが後は母がおと  
ちて故仕へかの席り講學して著述代をもと世縁を絶  
りと家へ近ひ聖人と稱むと無津著山と号門不以爲  
莫矣故人多徳圓と云ふ號を別号と稱へて号びるを

今ふ某くらむ所を修業の居候ふあるとあくと名を放逐せ  
給すとまセリとて藤樹は後門人と年は少く學と勤んと  
せうと領うけ仰くとて吾懲教へと考へお歸りたるより  
往々とぞして温かを伏とすとぞ承るが心解へる  
あり馬車をと事立つ化身一往車を遊紀やも哉と仰里ら  
風俗の道豈かく迷惑を拾ふをもかにしきぞ草木安え年  
秋ノ日をもと其夜ふ藤樹の享年 四一

○藤樹の歌

藤樹中江氏と號すとすて風吹れよを引ひあし  
まご門人無澤山と歲晚備幕ふ遠と送まひ

舊年無幾，且何意上旗亭送汝雲霄，器羞吾犬馬，齡梅  
花鬢邊白，楊柳眼中青，惆悵滄江上，西風教客醒。  
蕃山後，師授少當事，多才子，藤樹所以人情，氏，而  
翁，久慕名利，喜題詠，至其一雙厚，言行，如城，苦不  
以之，多能，也，而，刻，仍，

○近，以，少，別，書，復，年，才，有，方，飲，之，分，別，修，久，如，復，也，月，之，圓，  
經，之，復，也，而，飲，之，分，別，修，久，如，復，也，月，之，圓，  
之，備，章，小，藤，樹，之，深，立，之，像，あ，く，一，事，甚，紀，か，載，も，今，こ，と，あ，れ，  
有，傳，の，言，あ，某，あ，道，立，て，甚，そ，と，人，の，藤，樹，か，親，承，せ，し，者，は，圓，  
よ，す，か，く，復，章，を，見，像，か，傳，り，と，ば，

○藤樹著書目

- 學庸解 翁問答 鑑草 孝經啓蒙 論語鄉黨翼  
大學啓蒙 大學考 論語解 藤樹規 持敬圖說  
原人 文錄 書翰 咏草 春風 大乙神經  
日用要方 小醫南針 神方奇術 醫筌  
捷徑醫筌 藤樹先生遺稿 藤樹先生行狀  
藤樹先生學術旨趣大畧 知止歌小解 心學文集  
江西文集  
○藤樹乃事慶，八年後，至和，藤井，藏，修，序，序，今，於，序，竟，  
臣，撰，之，紀，事，記，之。

中江原字惟命號西江又號藤樹江州高島郡小川人也自少讀書頗有所發明世以德行稱焉其學宗王伯安凡海內之王學原倡之事母至孝弱冠初仕大洲侯信道德特登庸於是欲迎母以就養母曰吾聞婦人不越疆願守之原乃上書侯請歸甲里終奉養不許喟然歎曰嗟忠孝不能兩全吾雖不肖豈一日曠定省乎即為書白不忍之情忽行歸小川事母能盡其力无所不至矣其心謂莫百爾德行不本於孝日先讀孝經而後涉他書大洲士庶不遠千里來學他自遠方來游者不可勝計鄉人親之如親尊之如神一鄉皆誦論語孝

經勸事孝悌小川市橋君采邑有一民連坐繫獄者親戚來原許悲傷請達寃邑宰宥焉原曰若狀不死然予為汝明日夜抵邑宰邑宰倒履迎之設宴飲酒樂甚夜半乃還厥明邑宰免鄉民小吏問曰何以急免鄉民對曰以昨先生來也吏曰先生前夜賞風月已未嘗及彼曰先生无至官舍而夜間來閑談余謂必此事而終席不及之鄙心感慨知必為此故也彼本小罪它日出之則無報先生故爾人尊崇如此云著孝經啓蒙翁問答又有書簡一卷慶安元年秋八月卒年四十一鄉人如喪父母葬于先塋之側題曰藤樹先生之墓造祠廟那

老主之四時祭祀、一諸侯駐駕門外、令村老關門、不肯。曰、凡謁廟者、達廟門數百步下、輿蹙々々入拜堂下、無貴賤、一矣。今接肩輿石砌、日闢戶甚倨、非文神道不奉命。候謝過、請入、曰、晚矣。願再卜日急去、不顧、鄉人仰止如此云。

○藤井懶齋撰傳銘曰

淡海吹起、陸王儒風、豈翹善身、誨人有忠。

為母顛祿、旋鄉色渝、于嗟篤孝、性平學平。



山崎闇齋

閑齋山寄氏名へ嘉定を教義著しめと號をも後半加と號を  
俗稱嘉吉萬つとりふらむと號をも葉都山寄ふ後ひづく  
民よまと父城山寄降國といひ聲どりて京師ふ住むと母佐久間  
氏嘗くは叢山お神より多く閑齋を産むと承年少生れ  
幼少て狡悍無禮ありて父うやんぐてめいのふきく  
懲りて母の教訓と身を或日佛業み事く看經一儀起く  
かのふ教の師駿く其く一伏向ふ答へて云釋迦のモハ徳を  
笑ひとひて長じてふ及び四方ふ遊び止歩吸紅葉ふ窓と時ふ  
谷時中儒經を繕ひてふ兼ひと省ひあく達ふ龍々儒と

學書忽珠ふと擲て闇異とす下書を著と土州の大守直淳  
と歴代紙の多きとアリてあまこと憎む狀ふ於く書を治ふ  
後和孫侯井上侯まこと金津彦不游本を時年生て御子ふ  
ゆとされを弘むれり垂加の號あり垂加の文もあき御子  
ふるをもとぞ学ぶが爲め其風を蒙と極むがるか一書ふ時道中垂加  
祖ある天和二年卒と享年二年立其門人私鑑にて垂  
加書社祖長命と號をも葬墓は里谷山崎嘉義山門教  
義墓と題す

○閑齋初め佛入を後儒と號り是處の神道と傳もとまばい  
仁壽嘗て公署ある僧と戲の傍ふ壁一晚翠神道と云ふ傳なり

○人長壽あらうばはのべ人傳をもとあらんと祥せーとぞは論の  
まをもあらうりあふ深くあらへれうねどと大儒ふ仙人す  
そそき特操あらうふ思ひる

○闍齋門人ふ接へてサへおあやめらと仰も事あ  
わう移銅金年をもあらへてあせじけへと切ふ闍齋おきく  
見くあを勧へ御座を直と切何が徳をと金年をもあ  
育てふ人へを伏へあへとせ  
○事あ五つ余の時群事とあざめひと葉ふと御鬼車吉  
たりふ義を一せまへの事と何とも或へてひよる事  
などへと事と傳ひゆう事あゆ指りちのり近づく

○其人端へと見えられゆふも興ふべとて葉ふと  
出へけとび首へ掉へておもむくとまごが為あらば人ふもあ  
能する能あり名獨りあとめかへてほくとむくとむく  
其人教異とてどき凡事ふかくもどとむく

○闍齋著云目録

同續集

同拾遺

垂加文集

闡異

四書序考

文會筆錄

孟子要畧

朱易衍義

大學啟發集

小學蒙養集

孝經外傳

仁說

孝經詳畧

逐錄

大家商量集

讀書要

逐鹿評

夜寐箴

張書鈔畧

程書鈔畧

朱書抄畧

冲莫無朕說

經名考

大和小學

雲谷記

溫泉遊艸

不自棄文

江府紀行

再遊紀行

中臣拔風水草

朱子輯要

會津風土記

神代卷

感興詩注

風葉集

遠遊紀行

責沈文  
日本書紀注

喪禮儀畧

敬齋箴

孝經刊誤附考

本朝改元考

明備錄

武銘

本朝事蹟異稱考

白鹿洞書院揭示集注

自從抄

大學規

朱子奏劄

○此外訓點之書目

大極圖說

山北紀行

四書

孝經

近思錄

周易本義

周子書

論孟精義

社倉法

拘幽操

朱子訓子帖

朱子訓蒙詩

神代卷

古語拾遺

城南雜錄

五友詩

○閣齋比事屢々山崎家譜自記すと大高坂季明乃撰傳  
水足安直乃撰行實何より長文少く墨すと角田簡之略  
傳

山崎閻齋名嘉字敬義京師人其先播磨宗栗郡山崎  
邑人因以氏焉父清兵衛臣木下家後致仕號淨因來  
家京師以醫為業母佐久間氏有姫祈比叡山神一夜  
夢拜神時老翁携梅花一枝來納左袖遂生男即閻齋  
也閻齋幼狡悍無賴淨因患之因度爲僧籍於妙心寺  
號絕藏主天資豪邁卓犖一意修禪無懈怠然性行猶  
不悛嘗與倫輩論議閻齋詞理塞即其夜竊就彼寢火

紙帳衆議欲逐之當是時土佐公子某居妙心寺八子  
聰明有藻鑑歎曰此兒神姿非常後當有為乃遣之學  
于土佐吸江寺是時土佐有谷時中野中兼山與俱切  
劘儒學一見閻齋亦深器之而惜其陷異端勸讀經籍  
閻齋乃讀四書及朱子文集語類等書大悅之盡棄其  
學而學焉著關異一卷貼著寺門而太遂復髮為儒時  
年二十五土佐侯乃責其不陳乞輒還初服閻齋恐遂  
出奔京師下惟延役講習道學從者日衆履盈戶外閻  
齋師道至嚴如君臣然雖貴卿巨子不置之眼底雖小  
過不少假色善罵焉其講書音吐如鐘面容如怒弟子

震懼莫敢仰視焉佐藤直方嘗云師事闇齋每入戶心  
惴々焉始下獄然及退出戶則洋洋焉似脫虎口其見  
憚類此也後闇齋如江都時寒寢如洗特鄰書商貨居  
以借閱其書當是時井上河內侯好學下士書尚亦數  
謁見一日侯謂商曰寡人將學爾之所知有足為人師  
者請為从商曰近有一儒生山崎嘉者自京師來住小  
人東家視其所以度越尋常閣下而召之其得不虞之  
幸福也豈不感奮思答恩乎侯大喜乃延致商歸告闇  
齋闇齋毅然曰侯欲問道則先來見商鄂然以為措大  
不通時勢若薦若人必陵上無上累自及不若不薦也

他日侯復問曰疇昔所告山崎先生如何商曰小人非  
情也前日既傳命於渠渠曰侯先來見余是非頑愚不  
可曉卽狂率邀名也請別選通儒俟咨差良久曰方今  
自稱師儒者多無意行道東奔西走欲其技易售寡人  
聞之禮聞來學不聞往教山崎先生能守之此乃真儒  
也卽日命駕訪其居會津肥後侯加藤美作侯亦厚禮  
師事闇齋而會津侯敬信最深終始如一闇齋亦感奮  
思答恩知莫不言焉會津侯卒後又歸京師上自臺閣  
公卿諸侯而下至布衣閭閻之士入其門者無慮數千  
人矣闇齋治程朱學孤峻褊隘峭設畛域不喜博覽不

好詩文，以爲玩物喪志。每有片言犯程朱者，輒咆哮勃怒，不肯就同異而究指趣。是以其弊往々膠泥而不融至渝于支離墜於固陋。若晚牛大倡神道君子甚譏之。高足弟字佐藤直方淺見網齋其餘反之者亦甚多矣。天和二年年六十五沒門人私謚垂加著有朱易衍義孟子要畧文會筆錄太學啓蒙集中和集說孟浩錄孝經刊誤附考冲莫無朕記中臣技風水鈔神代風華集垂加文集著四十餘種。

卷二

熊澤蕃山肖像



## 熊澤藩山

○ 蕃山姓の無澤を賣伯祖家に了承する所とも書きと通稱  
次郎ハ後ふ勤右衛門と改む蕃山と號をす。貞恩遊勤もしく年  
其の野尾氏あり。父を降尾一利とりひ加藤左馬助仕へ後改仕  
して京師立家ふて蕃山を生み。熊澤の外祖父守多もく者  
皆之をあとへて、主膳と同母と蕃山を和立年が生む幼少の時  
智敏ふ起へ十石家をて國山剣をば仕へ。後京ゆる延慶にて徳と  
成一村と達一とき備薦ふ付へて禄三千石と賜。至刑役不興つ國  
中の事曲つと改革へて、廢難と一新し。海内の耳目を驚かし  
濱澤からぬるが故ありて、傍彌をもて京師ふぞく又橘川あふ

隱き自ら酒井と號。一わ秋あど吟。一樂みとせ。が後又明石  
修ふ仕へ移朝ふ後ひ。而後古河不徒て上表。達言せ。一事ある  
罷を。蕃前より被ふとを贈ふ幽蟄せられ後え禄四年八月十  
九年と年二十と古河大徳院延寺中奉事。其後ふ妻  
や。部氏お墓をもゆ。

○ 蕃山事の無澤ふゆふとひも後や異國あり。寢ふ經世有  
國の學ふ城ありと城又豪傑ふ勝て樂とゆく画とく。一わ秋  
通ふと其の孫第一本首とく。かくと  
寔え七年はもてて死ふて吉野ふ塚くまみゆふ  
此まちかう。すむ所れゆれや。人とさりてとぞ。すまき花のまき

おあい申す年間古めく

ほそくあくまくかわせ代ふうじゆと人馬とを絆むわくふくら  
ぬき ほふねやかりのあらそんあらじよもあきん  
ぢんざくみ さか さうじよくわん ちあくちよ さくざ  
蓄ひ運と被りへん身を立て本のをさう甚くましゆ候鳥とを  
考むるにそんとか死れ車ふまうけゆくや帰るノアハ  
ゆく身ふせんがくめんせんがくめんせんがくめんせんがく  
もも人馬かくさむがくめんせんがくめんせんがくめんせんがく  
ゆく身ふせんがくめんせんがくめんせんがくめんせんがく  
まく蓄山備あつて立候と仰りまくまく教へ教へ教へ教へ

ゆく身ふせんがくめんせんがくめんせんがくめんせんがく

人馬をもとめくめく 人馬をもとめくめく  
と伏まくもくと伏まくもくと ほほもくもくと樂くもく  
○蓄山京師おもろひ時加勢多木能持は後を急の義徳ありしも  
馬車おもろひ再び思とせばらは能持はまの徳化の音  
しゆくもく人馬をもとと通候を食たるありとてはあく前  
おもく隨候を待ひふ人ふ敷ゆだら經の学をえりとと仰されど  
蓄山ひくもくとおひこより能持の門ぶりもくとおひこどは能持能持  
お母のうおもくとおひこより能持の門ぶりもくとおひこどは能持能持  
馬車おもくとおひこより能持の門ぶりもくとおひこどは能持能持  
蓄山ひくもくとおひこより能持の門ぶりもくとおひこどは能持能持

○ 蕎山小倉サ特と云改め播心座を樂と奉る樂あり  
著ふれ書くも筆へ舌をも圓も走り後も筆をすて圓ぐ筆  
筆も筆成すく舌をもすてあつ筆も圓も圓がすの筆  
筆算筆をもすてそき小稿トモナリのありあらふ経文筆一  
筆も吹き一圓もとからぐれ筆をもすて和せざる筆  
筆も筆で面めたもすてとひき筆と筆へかくしかる筆の筆  
筆も筆しとり筆と筆と筆へかくしかる筆の筆  
○ 琴音像に筆ひもぐれど已れせうや照花筆たゞし河野の氏  
家ひのじと原圖被甲乗馬の姿あまごど今れ故と改く筆

○ 蕎山著書目次記

集義和書 集義外書 大學小解 中庸小解  
論語小解 二十四孝評 夜會記 三輪物語  
宇佐問答 三社託解 神道大義 繫辭解  
五倫書 大學或問 孝經小解 孝經外傳或問  
女子訓 易解 源氏外傳 紫文物語 葬祭辨論  
○ 蕎山の履歴門人巨勢直幹の筆記草加定環の筆  
菱川古鏡の傳記あり今更定若撰す行狀とく小舉ぐ

先生姓熊澤諱伯繼字次郎入後更助右衛門其先紀  
人中世關左人祖考熊澤某字喜二郎與其父居尾州

勝國之時事。神祖後仕水戶侯考某字藤井衛本姓野尻

娶喜三郎女士先生於平安維元和已未也此時祖考未事。

云畧注

神祖居平安五條遂育其家為喜三郎嗣。

寬永十一年甲戌先生歲十有六仕備前侯是板倉內膳正京極主膳等之所薦十五年戊寅先生歲二十辭退其官寓江州桐原十八年辛巳秋八月適江西書院請受教於藤樹先生藤樹先生固辭不許故空歸矣冬十一月再往江西寓邑人淵田氏之家而經日於是藤樹先生感其志而始謁之得其所志隨居江州數年其考野尻君其弟仲愛君流憲君女弟三人俱居此正保

乙酉備前侯依京極主膳再求以祿之于時先生歲二十七備前國政大革承應甲午備之前中二州大飢窘迫及九萬人國老不知計為乃委事於先生先生出命施政民大賑尋修隄池蓄瘠磽上下得所安遂設庠序之教其舉皆出先生及其家弟與焉制減佛寺壞淫祠慶安己丑先生歲三十一年候於東武侯伯大夫士大欣慕其道不可勝數猷廟聞而寵之侯伯之稱門弟子者紀伊大納言賴宣卿大小路伊豆守信綱板倉周防守重宗久世大和守廣之板倉內膳正重矩松平日向守信之堀田筑後守正俊板倉內膳正重道松平備

前守某淺野因幡守長治中川山城守久清松平備後守恒元織田内匠頭信房久世三四郎廣也板倉市正重元荒尾平八某水野周防守忠增本多下野守忠泰松平若狭守直明等云明暦三年丁酉先生歲三十九蘇病辭備前居京洛前是先生狩轉山中手足傷故辭武事云備前侯令其季子池田輝祿為先生之後自是先生更名稱了从居京師學雅樂習國典一日微服吹笛有安倍飛彈者聽之曰非常人其心情之正卽發音聲云先生嘗發揮紫女物語得其微旨後傳中院通茂卿洛之公卿大夫顧事先生者一條右大臣教輔公久

我右大臣廣道公油小路大納言隆貞卿中御門大納言資照卿伏原三位宣幸卿中院宰相通躬卿野宮中納言定綠卿野宮中將定基卿清水谷大納言實業卿押小路三位公起卿久世中納言定清卿諸君云覽文丁未先生歲四十九京令尹某信誣逐先生先生遷居城州鹿背山己酉先生歲五十一年播州明石侯松平日向守受縣官之命待先生於其封內於是居明石太山寺之側名其軒曰息游門人遂稱之延寶己未從侯移和州矢田同州郡山侯本多下野守實敬先生不減於矢田侯貞享四年丁卯又從侯移總州古河冬十月

上表演政事忤旨乃禁錮元祿四年辛未秋八月十七日殯古河壽得七十有三正室矢部氏者元祿元共買其地邑大堤鞋延寺之土以儒禮葬之謚曰蕃山先生先生之在備前以食邑蕃山故為謚字也先生生四男七女其所出矢部氏也一女厚二女載各適播州人伯某字右七郎氏蕃山仕備前侯仲某字左七郎氏野尻仕明石侯三女留適江州人四女咲適備前人五女房適江州人叔某武三郎仕本多下野守季某字左四郎仕明石侯六女俊適播州人七女某也



伊藤仁齋

仁齋体高氏名の確、眞字の源祐祐の源吉と號し、また子義堂と稱す。幼く嘗て櫻隱の室あり。京師の人そぞ生れ、其の後より家もと商賈ある。延宝四年、自其母生没後、幼く後を嗣ぐ。而してふ傷がわて一世の傳也。と志と親戚の醫歴勧む者多き。と隨て自ら刻書して、中理學と修む。年三十、七八年、比く、家儒の學と較ひ、是より程朱と排斥して古學と揚へ、門戸と並に、極川を往く。極川學と號する。又、生徒利を授く。本學を著者數を多く。然後、侯の名跡を承る。又、緑牛石と号す。時とて、老母の侍奉者人多しくて、

緒て仕事生涯をめぐりて終る。利種不移されざる如く、やまとりて、年三十、八九歳まで家道を経て、そぞ勤めをよみがへ代り、傷あると、國の門人あらざるかく、たゞ、游渾修復、宣教と、おとこ國の人材をせざるの、とて、其處をあはね。あはね。年三十、四月、卒す。享年五十九。父義宗が葬る。私語て古學を生まん。と云ふ。  
○仁齋の母傷の異端をめじよ。似てや節を以て、おとこ、修復をやめて、厚きあくびをとて、坐す。佛の法を過ぎて、心其を坐せば、殊に、通達の、人義井が、法事の、間で、御て、それを助ける。また、通達の、人義井が、法事の、間で、御て、それを助ける。せつと、通じて、其の、あらう、物をもづく、おとこ、おとこ、修復を、古學を生まん。

○ 仁齋の教ふ

前後を絶ゆ

風流の外は極めて多く指しとひるべからず

七夕

きのちの修がりの福氣でせうめんあらわす

自とあがめ

戒慎恐懼の意を

思ひよれば此身の外ふ事もあらがせむ。道をもよれ  
仁齋の性質の風を極めがくふ新事に情向り平生不

善酒。一盞即驟然と作さうとする義士小野寺十内と號す。其母九十歳を加ふて諸あり其能く  
母氏年高九十疆無憂無病又無傷老菜孝思誰能識  
膝下猶呼為小郎

生て名石良雄も仁齋の門下學ぶ

○ 仁齋著書目

論語古義

孟子古義

中庸發揮

大學定本

大學非孔氏之遺書辨

春秋經傳通解

周易乾坤古義

讀近思錄鈔

仁齋日札

送水野侯國字序 和歌集 文式

性善論

心學原論

○仁高は事度の東准撰も古學の生紹成紀事不傳事小  
處此材可易撰也る墓碑語也

先生諱維楨字源佐號仁齋姓伊藤洛陽人自幼非凡  
既長好宋儒理性之學後疑宋儒學非聖人正統大學  
書非孔氏遺書及明鏡止水冲漠無朕等說皆出於老  
佛直以論孟教授最善講說發揮聖意勸誘學者詳悉  
審明親切著實如尋常語聽者驚動多所奮厲從遊者  
繼于門其文也思致確實議論深長不用綺字不見艱

滋每一篇出四方兼傳對州醫生齋歸流傳朝鮮慶州  
府尹見而歎曰昔新文佳不意日本有斯人其性也寬  
厚和緩不見憤怒剪徹厓幅於物無牴無貴賤少長愛  
而周之雖粗鄙暴悍者一再相見則未有不薰然而心  
醉焉家又屢空而處之恬然未嘗覺其不足也先丁妣  
孺人憂服甚尋服考府君喪三年著論孟古義十七卷  
中庸發揮大學定本共一卷論孟字義二卷童子問三  
卷文集三卷詩集一卷娶緒方氏後娶瀬崎氏五男三  
女皆能研家學嫡長胤最明穎善文寬永丁卯七月廿  
日生寶永乙酉三月十二日卒年七十九葬于小倉山

先塋之次私謚曰古學先生嗚呼悲哉銘曰  
先生高尚不近利名洙泗正統本邦主盟  
無一時用有千載榮學耶德耶日月雙明



伊藤東涯

東涯姓藤氏名の長胤字は源藏通称ふ園也號玉齋と號す  
仁宗の書生となりて家學承傳して達筆を授刻して考究を  
著すと其子桂川は東涯の孫也文才  
年四百八十生を母へ傍方氏數第四人皆繼母澤秀氏が生  
三子後也と愛弟とすりて是年三十家學をとどめ退すと也  
人歎賞して伊藤の筆と云ふ事多く重慶やび重慶を筆学  
力優すと聞くと伊藤の首尾筆と云ひて其の後の筆すと  
恭儉謹慎すと不雑行の君子儒あり人仰を非常とす  
徳をば悪ことあると善い人ひれを重慶もと代傳すとされ  
徳をば悪ことあると善い人ひれを重慶もと代傳すとされ

善事ありと善くするが故に何乃言ひ事も物語とて詠と教と  
之言事は能うざうざありとぞ父業とすと終身官途不  
就うべ家店とぞあらまく莫れを教育一伏の嗜好あくと書  
も書を難く事ありとぞ門下乃授徒高か傑多く跡をえ文  
え年七十有八年を享年六十有八年山中食ふ事の私鑑  
経述先生のよ

○東涯は學識は敵つ者すとほ戸内組焉から東西藝園の  
主盟たるをせん二人の古ふゆる者すとふあうし東涯候ふ事あら  
居當世の名人の間の巻く傷者少く伊藤源藏号東涯著生懇  
古事の来<sub>其祖</sub>藤翁の中根友安高門名樟宇久留西林の筆すと

初井医府先生 廣澤官職紫雲山人初井安官醫門名義知神道  
加茂の梨木氏之號號へ紫木次郎吉萬門少く誠其事  
言ひ市川園十郎午とあり其は所有名れを處まつて  
見る會

○東屋逢中かく葉錢をすまし拾ひをよび數枚金向りに充  
物と捨ひとて其事は暮修勢の師少齋と大神主の初  
時人はかくも圓三郎をどひとすすめの夜途中壁  
某せりと此程の一人家が用心あらず捕ふりどりてお音をされ  
悟らん人を遣へばの隣にて再びびくとぞ闇を欺ざる  
ぞよりの也たり

○東屋書籍を持てて小城ひむに待ひ

切戒書生謹繙編

まこと仁齋と曰ふと呼す母を尊むる所

小野寺氏秀和宗母高氏九千壽渡野内五  
侯京部官

羨君官政不遑時慈母九旬絲髮垂況復一堂不違養  
更無晨夕依門思  
また嘗て平野傳文ありと紀載協あく持名早野勤平  
あるこれありきりと報述集ふ是を

○東屋著書目小

唐官鈔 學問關鍵 用字格 童子問標釋  
古學指要 訓幼字義 勢遊志 古今學變  
經學文衡 制度通 辨疑錄 經史博論  
名物六帖 讀易私說 异學辨 語孟字義標注  
通書管見 鄭魯大旨 繹親考 大學定本釋義  
天命或問 助字考 復性辨 中庸發揮標注  
刊謬正俗 盖替錄 同餘錄 古學先生行狀  
三奇一覽 經史論苑 秉燭談 周易經翼通解  
周易義例卦變考 四書集注標釋 帝王譜畧  
和漢紀元錄 大極管見 本朝官制圖 後漢官制

明官制圖 歷代官制沿革圖 沿革圖考 用字格 童子問標釋  
東涯漫筆 間居筆錄 古今教法 唐官品圖  
轎軒小錄 三韓紀略 紹述先生文詩集  
讀易圖例 足外寄也家藏也者以之也  
○東涯の墓碑文ハ西宮御廟原市雅云携モ篆額ハ權半納  
言石墓系伎後卿筆も古中羽善善莫朝卿あり人多かこれと  
とまとお家春基も當承へて匹夫而受是尊寵何其榮也  
嗚乎東涯先生已矣先生名長胤字元藏號慥々齋東涯亦  
其所自號竟以號行海內皆知有伊藤東涯者而今已矣嗟

乎蓋自孟子沒遺經僅存而聞而知之者世無其人西方之傑遂投間隙舉世傾動靡然從之碩儒巨師雖痛排之然浸淫其說以解說聖經我古學先生勃興於本邦得不傳之學於遺經以倡天下而升堂觀奧稱高弟者又不鮮矣先生其冢子而緒方氏之出也生長膝下趨庭之訓異聞居多故校訂遺書公諸世至以同人之視聽蓋不有繼志與述事則曷能障川迴瀾耶資稟甚異三四歲能知字長而博學強記最善屬文為世所稱孳矻種學渟滀涵浸莫能測沈靜寡默恭儉謹慎口不言人過不事表襮不設防畛終身不仕講學於家剖析經義蠶絲牛毛然未嘗強以語人而就問者日衆遠

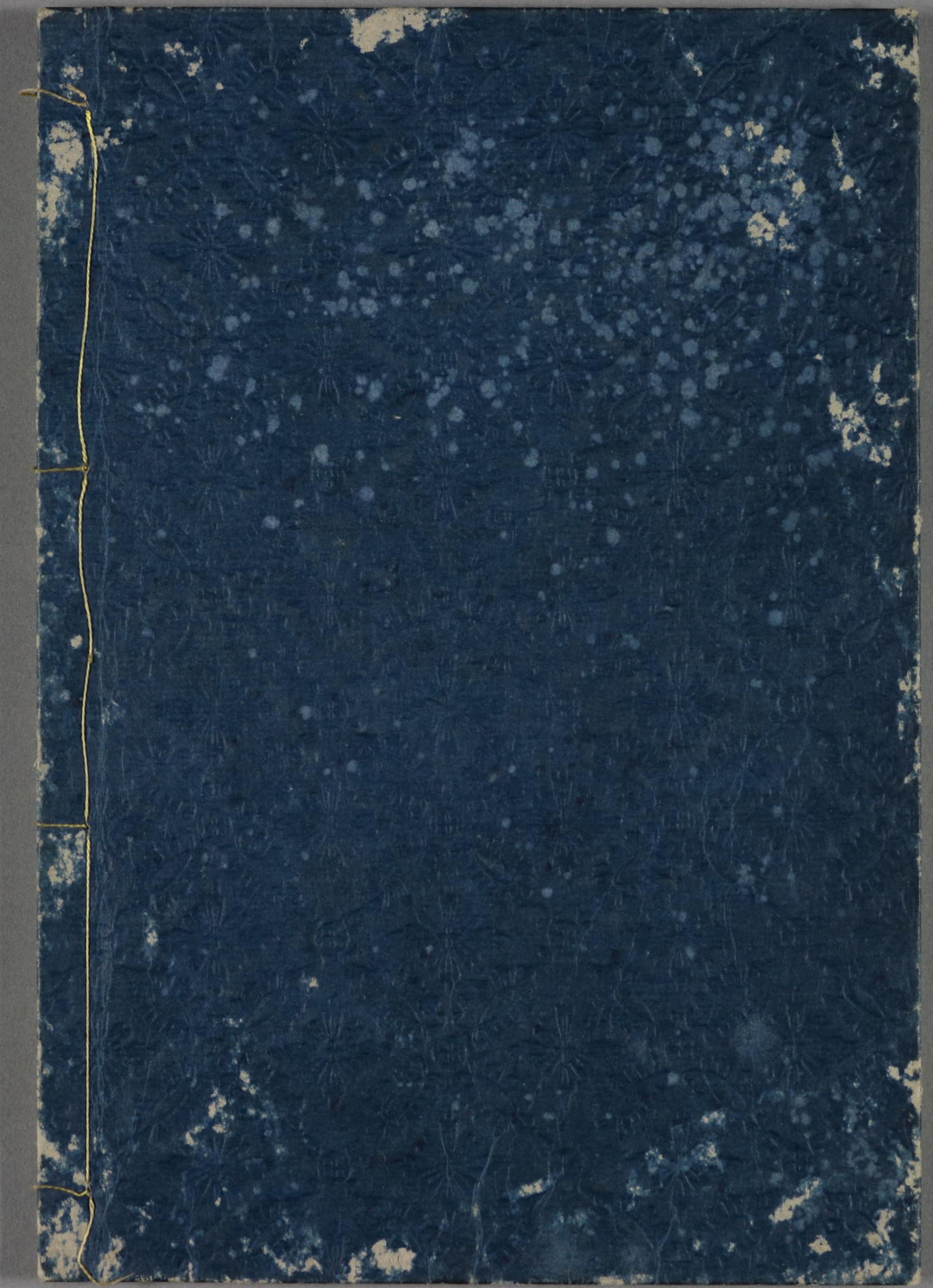
近尊之無他嗜好祁寒暑雨未嘗手釋卷每有所得則輒筆之故其書滿家既稍登梓文集三十卷周易通解等未刊布生於寬文庚戌四月二十八日死於元文紀元七月十七日己酉享年六十有七娶加藤氏子男三人曰世俊曰世倫俱夭曰善韶今纔八歲女一人其弟門生經紀喪事遂葬于先塋之次私謚曰紹述先生云其存日令季弟長取需余序其集頃長堅再拜謹泣以告曰集序亡兒在日既蒙見允誌其墓願亦藉補袞之手地下若有知拜辱有餘回上台之光下耀草莽巖穴仰公之德永世罔極且曰吾家兄弟八人先人死日坐食在家入或勸其出贅為人之後者亡兒一不省與

俱啖苦攻淡日勵學行以要似續昏頑之質稍有所成皆出就仕女嫁有室生我者父母而長我育我者皆亡兄也今獲鴻文而使其言與行之不朽我報亡兄亦稍足矣吾祖公曾知其父之業文余亦景慕先生則豈可孤其請耶遂系之銘

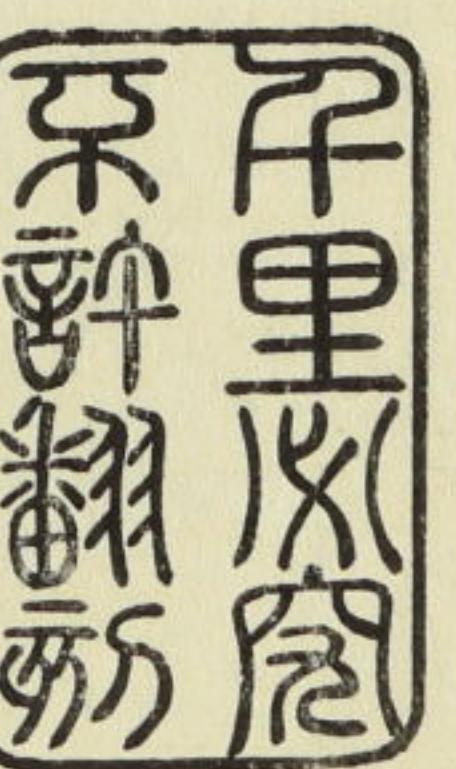
曰

淳謹之質 汪々巨量 耿潔甘節 休聲遠揚 克纘  
先志 篤崇聖賢 文辭純正 典籍精研 居家孝友  
厥德惟馨 遺名千祀 墓珉勒銘

先哲像傳卷二終



德齋原義著



先哲像傳 全四卷

弘化元年甲辰 潤身堂藏梓  
季冬新鐫